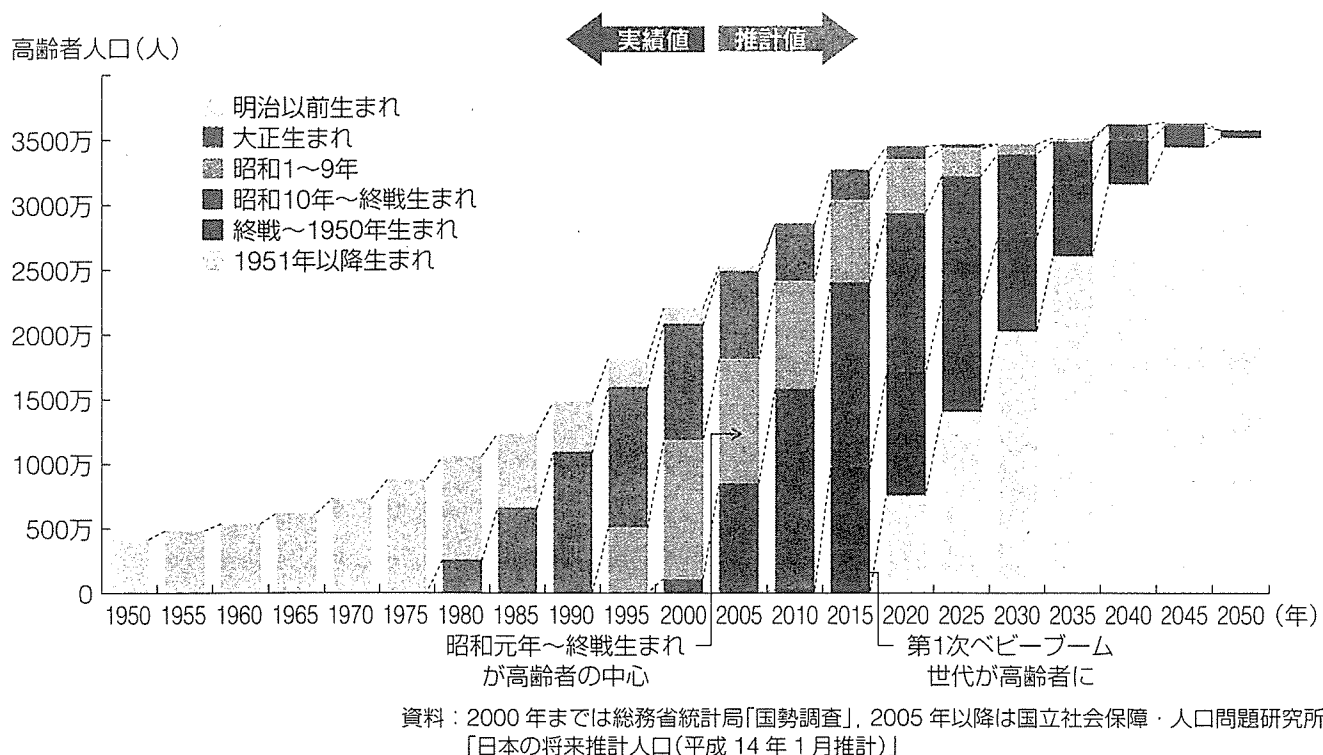


図1 日本の高齢者数の推移



くべきではないだろうか。

■地域保健サービスの受け手、担い手としての団塊世代—60代前半のシニアでシミュレーション

団塊世代のイノベーターへの対応として、現在すでに健康づくりの分野で対面している60歳前後のシニア層をイメージしてシミュレーションすることが具体策と考える。彼らは保健事業への関心は高いが、年齢的に自らの健康課題は、介護予防にはまだ早く、メタボリックシンドロームや生活習慣病が主である。一方、ヘルスボランティアとしての活躍を期待するならば、介護予防や子育て支援を通じた地域づくりに大いに尽力してくれることが期待される。とくに、保健師などのスタッフの継続的な力量が問われるのは、自主グループやボランティアの育成・支援である。シニア世代によるボランティア活動は、ボランティア本人の心身の健康にも好影響をもたらすことが知られ、新たなヘルスプロモーション戦略の1つとして注目されている⁶⁾。

先述の東京都多摩地域での調査によると、24.4%の団塊世代が退職後に「NPO活動やボランティア活動への参加」を志向しているが²⁾、「社会意識に関する世論調査」(内閣府)における50歳代の「社会への貢献意識」は1991年以降2006年12月まで65～70%を維持している。この数値は同調査における60歳代の推移と同じである。言い換えれば、団塊世代のボランティア活動志向が突出しているわけではなく、現在60歳代の人が50歳代の頃に示した意向と大差はないといえる。

行政がこれまでなかばルーチン化し委託してきた「〇〇委員」といった住民代表と、事業別に募集したボランティアとでは、モチベーションやプログラムへの期待度は大きく異なる。ときには「餅は餅屋」の発想で福祉部門や社会教育部門、あるいは専門性をもつNPOとの連携により、講師派遣やセミナーの合同開催、さらには活動場所を相互に紹介・提供し合うといった試みを推奨したい。多様なプログラムを好む、団塊世代のニーズに応えることになるとともに、それぞれの部署の負担

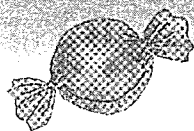
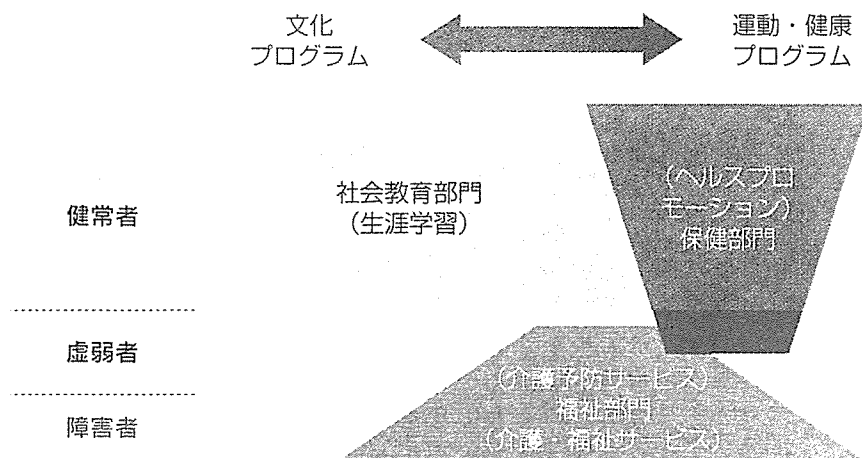


図2 高齢者向け公的サービスの提供体系



ア世代向けに多彩なエクササイズプログラムを用意しており、マシンにプールにシニアの利用者で溢れかえっている。一方、私立大学のオープンカレッジでも、食や運動についての講座が散見される。今後はこれらの民間サービスとの競合が予想される。

行政サービスとしての保健事業がほとんど無料である点は住民にとって魅力的であるが、逆

を軽減することにもなる(図2)。

■退職後は地元志向か広域志向か

インターネットを駆使し、心身ともにアクティブな団塊世代は、地元密着の活動で完結するとはいえない。「REPRINTS」研究においては東京都中央区、川崎市多摩区、滋賀県長浜市、さらに新規にフランチャイズとしてセミナーを開始した東京都杉並区においても、参加者は市区内全域からほぼ均等に参加している。実際のボランティア活動を行う際の小グループは、必然的に身近な地元密着型に分かれているが、保健センターなどの拠点を中心として同一ボランティア団体としての広域かつ緩やかな連携をもつことが特徴である。団塊世代もこうした重層的なグループ活動を展開する可能性は高く、市町村レベルでの広域地域全体のソーシャル・キャピタルを豊かにすることが期待される。

地域保健への影響

■民間サービスとの競合を想定し、独自性を出すことが効果的

好奇心旺盛な団塊世代は、健康づくり教室についても多くのアンテナを張りめぐらせている可能性がある。すでに、民間のスポーツジムではシニ

に経費の関係上、どうしても民間サービスと比べて、広告から講師、設備にいたるまで華やかさに欠けるのは致し方ない。苦戦を強いられる退職後の男性向け保健事業のなかにおいて、「男の料理教室」は好評である。高齢期のIADL(手段的自立)に必須の事業だが、企業イメージと採算を重視するカルチャーセンターの立場からすると、地味な家庭料理よりも華やかなソムリエ教室を志向する。この棲み分けがヒットの秘訣かもしれない。

■民間サービスの盲点(パイロット事業、モデル開発および事業評価)を強調

さらに、民間サービスに期待しにくいがゆえに行政サービスに期待される事業の方向性を確認したい。民間事業が経営上のリスクを避けることはいうまでもない。また、効率性を追求するがゆえにプログラム内容の質をどこまで維持するかは保証の限りではない。

行政サービスの使命として民間が躊躇するパイロット事業やモデル開発を積極的に行うべきではないか。また、保健事業の効果を多元的・科学的に評価していくことが求められる。現実には多忙な行政職がこれらプログラム開発や評価に時間を費やすことは困難であろう。大学などの研究機関との連携にその活路を見出すことが一策と考えられる。

■役所の看板変われども、自主グループは不変

東京都生活文化局「都民生活に関する世論調査」(2005年)によると、東京23区、市町村部ともに東京都内在住の団塊世代の約70%が定住を希望している。都市部でも、保健師は団塊世代と長い付き合いをしていくことになるだろう。一方、全国的に行政組織の再編が著しい近年、保健サービスの現場では課や係での業務の重複や空白部分がみられ、業務の遂行がさらに煩雑になっていると聞く。

しかし、役所の看板が変わっても住民は変わらない。住民の自主グループやボランティアを生かすも潰すも主催者(行政)次第である。

■社会参加のルールを確認しながら団塊世代と長い付き合いを

団塊世代は、自己表現・自己主張を優先する人々である。筆者の経験から、団塊世代の自主グループやボランティアとうまく付き合っていくには2つのポイントが重要と思われる。1つは、やってほしいことと、やってほしくないことを最初にオリエンテーションすること、もう1つは、彼らに可能な限り発言・議論の場を与えることである。

団塊世代は自己主張をするがその一方で、職場社会の矛盾を熟知した人々である。本音で話せば案外、理解を得られやすいものである。住民同士での情報交換や連絡会議を支援することで、職員および住民相互の間での信頼関係が構築され、さらに団塊世代が保健サービスにおける住民プレーンになりえよう。

繰り返すと、マスメディアが報じる超先進的な団塊世代は、地域を飛び越えていくであろう。「地域参加志向」というフィルターを通して地域保健事業に登場する団塊世代は、いま、保健センターで活動する60代シニアと大差はないものと予想される。団塊世代(保健事業における黒船到来の3年間)、これを活用するも見送るも、結局は保健師の力量次第ではなかろうか。

■文献

- 1) ハイライフ研究所:団塊世代の地域分布とその生活スタイル—社会漂流する団塊の世代。団塊世代研究シリーズ第4回報告書、財団法人ハイライフ研究所、2006。
- 2) 財団法人東京市町村自治調査会:多摩地域における新たな働く機会と場の創造—団塊の世代を対象に。東京市町村自治調査会報告書、2006。
- 3) 藤原佳典、西真理子、渡辺直紀、ほか:都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム—“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果。日本公衆衛生雑誌、53:702-714、2006。
- 4) 明石圭子、馬場富幸、勅使河原弘美、ほか:都市部高齢者の世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”—5.健康づくり計画の推進に与える影響に関する研究(その2)住民への周知度調査から。日本公衆衛生雑誌、53(特別付録):386、2006。
- 5) エベレット、M、ロジャーズ/青木慎一、宇野善康(訳):イノベーション普及学、産能大学出版、1990。
- 6) 藤原佳典、杉原陽子、新開省二:ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義。日本公衆衛生雑誌、52:293-307、2005。

藤原佳典(ふじわら よしのり)

東京都老人総合研究所社会参加とヘルスプロモーション研究チーム

〒173-0015 東京都板橋区栄町35-2

NURSING BOOK INFORMATION

医学書院

基礎から学ぶ 楽しい疫学 第2版

中村好一

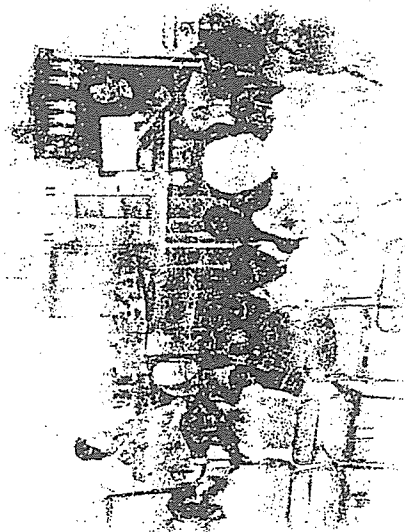
●A5 頁248 2006年
定価3,150円(本体3,000円+税5%)
[ISBN4-260-00169-8]

疫学研究の方法論、バイアスの問題、統計処理の方法などの疫学の基礎知識を、著者一流の切れ味鋭くユーモアに富んだ語り口で、懇切丁寧に解説。第2版では、個人情報保護法の施行を受け、「第11章 疫学と倫理」を大幅に書き改めた。

高齢者の「存在ボランティア」を追う！

介護予防には シニアによる絵本の 読み聞かせが最適？！

高齢者が幼稚園や小学校にボランティアとして入り、子どもたちに絵本を読み聞かせる——。定期的な世代間交流で高齢者の閉じこもりや痴呆を予防し、「生きがい」が介護予防にどれだけインパクトを与えられるかを検証する取り組みが、東京都中央区、神奈川県川崎市多摩区などで始まっています。子どもたちの情操教育、両親や教職員の精神的支援なども含め一石二鳥を狙ったプロジェクトです。幼稚園での読み聞かせを始めたプロジェクトの導入段階を追いしました。



高齢者が幼稚園で 絵本の読み聞かせデビュー

孫のような幼稚園児たちに絵本を読み聞かせを高齢者の男性。「はらへこあおむしは……」

よく訓練された声に、最初はさわついていた子どもたちも徐々に引きこまれ、いつのまにか絵本に釘付けです。

東京都中央区では昨年六月から、高齢者による子どもへの絵本の読み聞かせボランティアがスタートしました。世代間交流をとも

なう知的ボランティアで高齢者の介護予防をめざし、子どもの情操教育や親世代への育児支援も視野に入れたプロジェクトです。東京視覚入総合研究所が研究事業として事業を企画、全体をコーディネートしています。区の広報により集まったおおむね六〇歳以上の高齢者三〇人は、読み聞かせの意義、絵本の選び方から発話のしかたまで、三か月間研修を受けてきました。取組した九月三十日は、子どもたちの前で読み聞かせを行うデビュー戦。中央区立日本橋幼稚園で、三グループに分かれて訓練の

成果を披露しました。

読み聞かせに割り当てられた時間は、約三〇分と長くはありません。しかし、そのなかで高齢者ボランティアは三十四冊の絵本を読み、合間には子どもたちに手遊びも教えます。絵本の読み聞かせは、読み手の声質やキャラクターで韻したず味が変わってきます。「うわあ、すげえ！」「もう終わりー」。

読み手が変わることに子どもたちは新たな意欲に引き込まれ、目を輝かせて絵本に見入ります。高齢者と触れ合い機会が少ない都心部の子どもたちにとって、むかしながらの手遊びも珍しいもの。ハンカチがねすみに変身するようすなどを、驚きの目で見守りました。

教諭主任の加藤淳

子氏は、こうした園児たちのようすに「遊びの時間が終わった後なのに、あんなに集中して聞いているなんて信じられない」と驚きます。合間に手遊びを入れ、絵本ごとに話

の長さを覚えるなど、退屈させないために高齢者が凝らした工夫に手を巻く。「これからも週一回くらい来てもらえたら」と今後のかわりにも前向きです。

この日参加した七九歳の男性は、「実際に子どもたちの前で読み聞かせると反応があるから楽しいね。子どもたちも楽しんでくれたけど、私のほうが楽しかったよ(笑)」と元気に笑顔を見せました。一方で、小さい子どもと触れ合えることに魅力を感じ参加したという女性は、「ずっと練習してきましたが、子どもたちの前で読むのは練習とは違って緊張した」と声を弾ませました。

社会貢献が高齢者に与える 介護予防効果を検証する

「体力維持や痴呆予防は、私たちの生きる手段であり、目標ではありません。Well-being(幸福)を追求することこそが人生の本来的目的はです」。

そう語るのは、高齢者による読み聞かせボランティアのしかけ人、東京都老人総合研究所地域保健研究グループの藤原佳典氏で

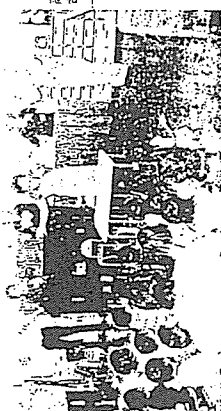
す。藤原氏は、医学的な視点だけで対策を行い、「いかに生きるか」の視点が重視されない現在の介護予防に違和感を抱き、「認知や感情、性化ドリルをまともなシニアが三五年も飽きずに続けるはずがない。介護予防は継続してこそ意味がある。高齢者に感動を与えるテーマでないと定着もしない」と言葉を磨きます。読み聞かせボランティアでは、高齢者が子どもに何かを教える立場に立つことで自己効力感の向上を、定期的に学習の機会を持つことで認知機能の低下予防などの効果を見込んでいます。人生の年輪が刻まれた声で絵本を読み聞かせることで、子どもに敬愛の念を抱かせ、社会のなかで高齢者の尊敬を回復させるというコンセプトです。また、研究事業としては、いままで十分な検証のなされてこなかった、生きがいづくりの介護予防効果についてエビデンスを得ることを目的としています。社会貢献と知的活動により生きがいを持つて生活することが、どれほど痴呆や閉じこもり予防などに効果があるのかを検証し、まず健康づくりありきではない生活モデルのアプローチの有

効性を確かめることが狙いです。

こうした高齢者の世代間交流ボランティアの試みは、アメリカで実施され、その効果が指摘されてきました。アメリカ・ボルチモアでは、黒人低所得層の子どもの通う学校に、地元の高齢者が入って授業の支援などを行っていました。この「Experience Corps」という研究では、児童、学校への文芸活動だけでなく、ボランティア自身の身体的・心理的健康にも改善効果があることが指摘されています(本誌二〇〇四年二月号「研究」参照)。藤原氏は、即座に開始にこの研究にかかわっていたことから、世代間交流による介護予防の効果を信じたといいます。

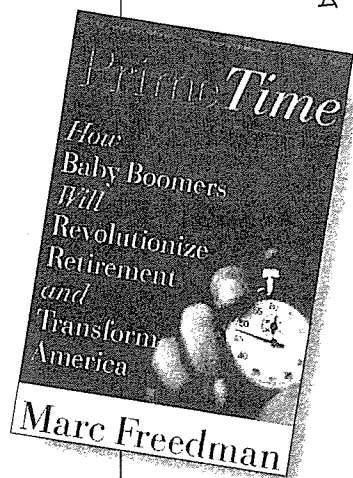
こうした世代間交流ボランティアのツールとして、絵本の読み聞かせを選んだことについて藤原氏は、知的ボランティアである絵本の読み聞かせが介護予防に最適だったと説明します。「絵本の世界は深い。文章は原文で読む位まで読んでいるし、一枚の絵からも多くのことが読みとれます」。絵本の内容を読み込み、時間内で読み終えるよう練習し、本書で過度な原

高齢者は、読み聞かせの合間に手遊びも教えた



東京都老人総合研究所
社会参加と
ヘルスプロモーション研究チーム

藤原佳典氏が 選ぶ一冊



アメリカの団塊世代対策の本で ライフワークを発掘

『Prime Time』
Marc Freedman著 Public Affairs Published

この本は、シニアボランティアに
関するシンクタンクを運営する

著者がベビーブーマーがどう自己変革
してきたかを記した団塊世代向けの啓
発本で、ここには彼が運営し、私が留
学していたジョンズ・ホプキンス大学
のリンダ・フリード教授が評価を行った
シニアボランティアによる公立小学校
支援プログラム「Experience Corps」
(本誌平成十六年二月号「研究員が見
たおもしろアメリカ留学記」参照)が
載っています。高齢者は社会の負担と
いう風潮を打破し、深刻化する学童の
学力向上を促し、かつ社会的ハンディ
キャップを背負った黒人高齢者がコミュ
ニティに貢献して誇りと元気を取り戻
すという一石二鳥を狙ったもので、身
体的・心理的健康度も見事に向上した
プログラムです。発案は、ジョンソン大
統領のブレーンを務めたジョン・ガード

ナー氏で、政府高官のしかけというの
が面白い。ヘルスプロモーションでは、だ
れがどこまでしかけるかがポイントで、
「行政は黒子」が原則ですが、一部の
専門職はこれをはき違え、すべてを住
民任せにします。しかし、住民にとつ
て健康はすべてではなく、そううまく
いきません。行政がある程度の道筋を
立て、いつの間にか黒子というのが
ほんとうの姿です。成功した自治体も
自然に歩き出したわけではないはずで
すから、保健師がどう汗をかき、行政
関係者は黒子として何をしたのか、き
ちんと示すべきです。この本には、そ
の辺のしかけや連携のステップが書か
れており、使える本になると思います。
私はこの本がきっかけで、シニアボ
ランティアによる読み聞かせという子
ども、保護者、高齢者にインパクトを
与える一石三鳥の取り組み「りぷりん

と」(本誌平成十七年一月号二二～二
五頁参照)がライフワークになりました。
た。高齢者は図書館での本の貸し出し
や相談、戦争体験を語る特別授業、昔
遊びのなどの指南役などに生きがい
を感じ、本務の読み聞かせで無限の本の
なかからよりよい本を選ぶことが自身
の勉強になっていると話しています。
アメリカでは週二〇時間の従事で月額
二万円の報酬を得ていますが、日本で
は週一日の訪問だけで身体的・心理的
健康度が改善するはずで、この辺は今
後の研究の余地が残っています。また、
この事業で使うのはほとんどが既存の
資源でお金がかからない。資源やサー
ビスを個別に使うのではなく、横につ
なげる利点も具現化しています。
ところで、この本を貫くメッセージ
は、自分を変えましようという提言で
す。団塊世代は会社を離れ、やりたい

放題できると勘違いしがちですが、私
が関わったシニアは、学校という異空
間つまり子どもが最優先され、高齢者
は二の次三の次という環境に自らの意
志で飛び込み、そんな空間でハッピー
をもらう謙虚さを学びました。いつで
も守るべきルールはあるものです。そ
れこそが社会参加です。これからシニ
アになる団塊世代が真の社会参加を学
ぶ場にもなるでしょう。私は、親の介
護予防と子どもの健全育成に悩まされ
るサンドイッチ世代で、この本のメッ
セージが自分の問題としてフィットし
ました。リンダ・フリード教授も公立
小学校に二人の息子を通学させた経験
から、著者と意気投合したと記されて
います。当事者意識も公衆衛生活動に
は、不可欠だなと感じます。この本は、
団塊世代対策を公衆衛生的な立場で考
えさせてくれる一冊です。

高齢者による
学校支援ボランティア
「りぷりんと」の
現場から

団塊・シニアボランティアの エビデンス

東京都老人総合研究所
社会参加とヘルスプロモーション
研究チーム

藤原佳典

忘れかけていた感動と 生活者とのディープな交流

私は駆け出しの臨床医時代、内科医として三年余り国公立の病院に勤務していた経験があります。しかし、患者さん個々と向き合う毎日の繰り返しの中で、「保健医療の世界を一步下がって幅広く見てみたい」と思うようになり、大学院進学を契機に公衆衛生の「業界」に入りました。

それから一〇年余りの間、さまざまなフィールド研究を満喫してきたわけですが、市町村ベースに数百人から数千人もの方々を対象にした追跡研究といえども、個々の方々とおつきあいとなると、多くて一年に一度の時間厳守の面接や、顔も見たことのないペンフレンド（郵送法による回答者）との限られたやりとりだけ、になってしまふのが現実です。

そうなる前から、新米医師時代に経験した患者さんやそのご家族とおつきあいを振り返ってみると、生活者としての彼らの実像やニーズを深く知れたのは、病院の外や勤務時間外（勤務医には勤務時間という概念はありませんでしたが……）での交流を通してであったことが懐かし思い出されます。臨床医としての腕前はお恥ずかしい限りでしたが、そんな交流もあって、死亡後の病理剖検の承諾率だけは自信がありました。ご臨終後一呼吸おいておもむろに、「実は〇〇さんの病気について詳しく

知りたいので、研究のために解剖をさせていただけませんか……」とお願ひするもの、主治医の仕事。周囲のレジデント仲間の承諾率の平均は二〇%程度だったにもかかわらず、私の場合は七〇%を超えていました。葬儀の手配などで慌しいなか、数時間もかけ、遺体に傷をつけることに承諾してくださる、ということはあるがたいこ

とです。こうしたことができたのも、患者さんや家族との日頃のコミュニケーションが良好であり、結果はともあれ、治療に満足をしていただいた一つの現われだと、指導医に褒めてもらったことが記憶に残っています。

さて本稿では、私がここ数年ライフワークとしてきた高齢者による学校支援ボランティア「REPRINTS（りぷりんと Research of productivity by intergenerational sympathy）」の、コンピュータに保存された各種データとアンケート票のなかに埋もれて忘れていた、生活者との「ディープな交流」から得られた「感動」を掘り起こして、ご紹介していきます。喜怒哀楽こもごも、ときにはまぶたを熱くした体験とともに少しずつ蓄積されてきたデータを、「りぷりんと」の現場からレポートします。ので、乞うご期待！

その「りぷりんと」についてですが、こ

れは二〇〇四年四月にスタートしたばかりの本邦初のパイロット研究で、保健、教育、福祉にまたがるプロジェクトです。私をはじめスタッフは悪戦苦闘の毎日でした。失敗や課題も山積です。案内役の私からは、ときには駆け出しの保健師（コーディネーター）として、ときには研究者（事業評価者）として、そしてときには「親の介護予防」と「子育て」と「満員電車」に挟まれた「サンドイッチ親父」として、みなさんにメッセージを送りたいと思います。

というわけで、第一回目の本稿では、「りぷりんと」研究誕生の背景をまずご紹介していきます。

ボランティア活動は 「Win-Win」をもたらす切り札

急速に少子高齢化が進むわが国にいま問われているのは、高齢者や引退を控える八

〇〇万人もの団塊世代といったいわゆる「シニア世代」による社会活動を、いかに社会全体の活性化に結びつけるか、ということではないでしょうか。

一九九〇年代初頭から欧米では、高齢者に潜在する生産的な側面をproductivity（プロダクティビティ）¹⁾と呼び、これを高齢者の望ましい老いの姿であるsuccessful aging（サクセスフルエイジング）²⁾の必要条件の一つとして位置づけてきました。そして、「有償労働」「無償労働」とともに、「ボランティア活動」をそのプロダクティビティを構成する社会活動の一つとして重視してきたのです。

そんなこともあり、私もわが国の地域保健事業のプログラムの一つとして、シニアボランティアの活用を採用することをずっと提案してきました。

そうしたなかで、ボランティア先進国である米国での先行研究を調べ、ボランティア自身の健康への影響についてまとめてみたところ、ボランティア活動に参加すると心理的、身体的および社会的要因が改善し、それによって心身の健康度が高まると考えられてはいるものの、実はそのメカニズムに関しては未解明な点が多いということがわかりました。

そう考えると、今後優先されるべき研究課題は、高齢者の健康増進にとって望ましいボランティア活動のプログラムを考案

公立小学校支援 プログラムは、 一石二鳥いや 一石三鳥です



「Experience Corps®」ボランティアは、担任教師からのアシストコールがあれば、すぐに学習サポートに入る。無断で教室を出て行く子にも、そっと寄り添う（アメリカのボルチモア市にある公立小学校で）

し、それがどの程度、健康に影響を及ぼすのかを実証する、ということになるでしょう。しかしながら、こうした介入研究は国内外を通じて、これまでのところ皆無に等しいのが現実です³⁾。

唯一といってよいその手の研究というのは、米国のジョンズホプキンス大学が進めているシニアボランティアによる公立小学

校支援プログラム「Experience Corps®」⁴⁾です。私は三年前、留学の機会があり、この研究を学んできました（詳細は、本誌二〇〇四年二月号―二〇〇五年三月号連載「研究員が見たおもしろアメリカ留学記」）。

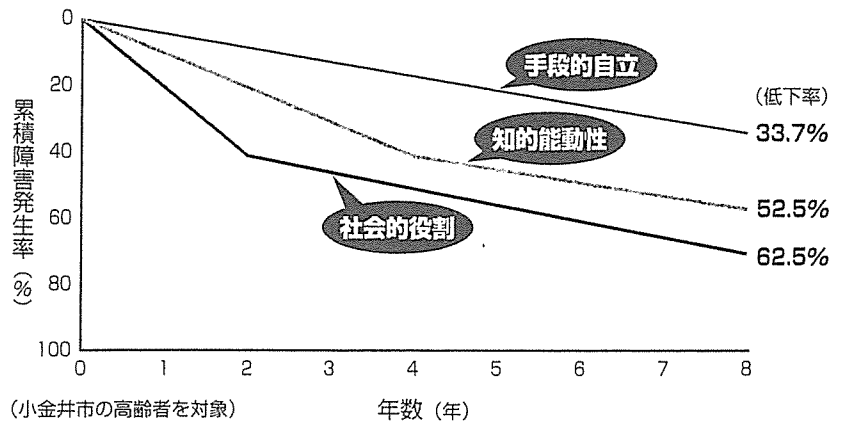
このプログラムのコンセプトは、単なる介護予防でも育児支援でもなく「Win-win!」。つまり一石二鳥、いや一石三鳥なのです。そして、このときの私の何よりの収穫物は、シニア、子ども、大人（学校関係者や地域住民など）の三鳥すべてに「ドラマ」があり、「感動」の連続があるということを実感できたことです。

遠く離れたボルチモア市の黒人シニアボランティアたちに囲まれながら、この「感動」こそが、研究者にとっては介入研究、そして保健師などの行政職にとっては対人サービスの醍醐味なのではないか、と再確認することができた、というわけです。

次世代への責任を 果たそうとする意思を賦活する

私はこれまで、サクセスフルエイジングの条件ともいえる「生活機能の維持」に関する地域高齢者の追跡研究を通じて、老研式活動能力指標での「社会的役割」や「知的能動性」に関わる能力の低下が「手段的自立」障害の予知因子であることを報告してきました（図1）。言い換えると、「社会的

図1 高齢者の生活機能（老研式活動能力指標）の加齢変化



引用：Fujiwara Y, et al. Longitudinal changes in higher-level functional capacity of an older population living in a Japanese urban community. Arch Gerontol Geriatr 2003; 36: 141-153.を改変

役割」と「知的能動性」を伴う社会活動を行うことが、介護予防に寄与するかもしれない、ということです。

この仮説をもとに、またその具体例として「Experience Corps®」を重ね合わせながら、ボランティア活動を「社会的役割」の一つと位置づけた高齢者のヘルスプログラムとその開発を試みました。

その開発にあたっては、世代間交流を通じた役割づくり、および世代内交流を通じた

役割づくりをそれぞれ第一、第二のコンセプトとしました。

まず、第一のコンセプトである世代間交流とは、「子ども世代への社会貢献」を意味するものです。世代間交流の第一の狙いは、「核家族化」「活字離れ」「虐待」「防犯」といった近年の子どもを取り巻く社会的なニーズに応えようとするものでもあります。

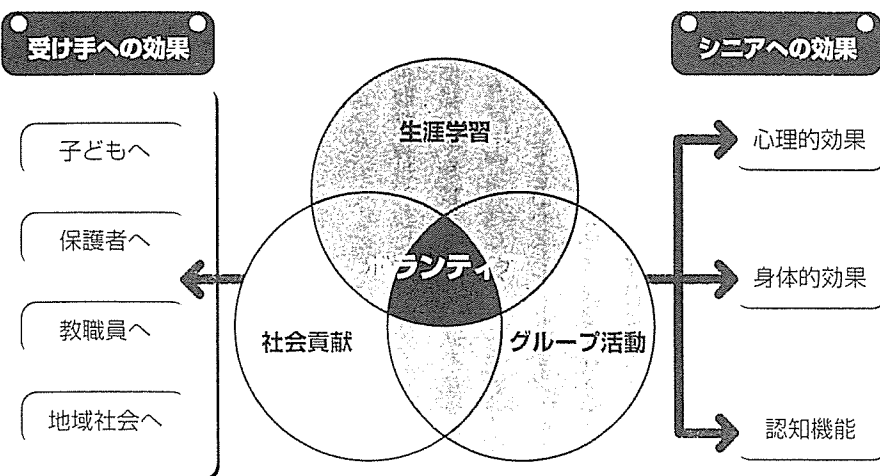
第二の狙いは、「generativity（ジェネラティビティ）」と称される、個人を超えて次世代をケアし、責任を果たそうとする意思を賦活することです。

ちなみに、ジェネラティビティとは、心理学者エリクソンが generation（ジェネレーション）+ productivity（プロダクティビティ）からつくった造語で、中高年期のライフステージにおいて成熟した人間に備わる本質的な意思であり、ジェネラティビティが発達できなければ、自分本位や自己陶醉に陥る、と彼は指摘しています。

私たちが日常、感動するシーンを振り返ってみれば、心にジェネラティビティがあらゆる事象の根底に流れているかがわかります。たとえば、脳梗塞に倒れたミスター・プロ野球の長嶋茂雄さんがリハビリ中に久々に現れたのは、野球少年たちとの交流会の場でした。NHKの大河ドラマでは、家康だろうが、新撰組だろうが、結局は「次世代へのバトンタッチ」がテーマです。そして、大ヒット上映中の日本海軍の男たちの足跡を丹念につづった邦画『男たちの大和』のコンセプトは、当時一五歳だった少年兵たちの決死の攻撃も、恥を忍んで生き残るのも、いずれも「次世代のため」ということでしょう。戦後六〇年目に七五歳の元少年兵の漁師がいまどきの一五歳の弟子に対し、背中を語り継ぐというストーリーに私もハンカチを濡らしました。つまり、このように私たちのDNAに刻まれたジェネラティビティをくすぐることによって、高齢者がボランティア活動を長期に継続するためのモチベーションを保てるのではないかと期待したのです。

そして、第三の狙いに、子どもへのボランティアを紹介した親世代との信頼関係の「復

図2 「りぷりん」とボランティアに期待される効果



を掲げました。「年寄りの冷や水」だとか「転ぶと危ない」という、家族や周囲の人たちの無理解や非協力により、高齢者の社会参加が阻害される場面がよく見られますが、その根底には、高齢者を取り巻く潜在的なエイジズム（高齢者差別）5) が存在することを見過ごしてはいけません。一方、早朝の新幹線などで、真剣に書類に目を通し、

仕事の準備をする、出張途中のサラリーマンに目もくれず、大騒ぎしている「三六五日大人の休日」的かしましバアサンや、「近頃の親はなつとらん！ ニートやフリーターは論外だ」などと講演会後の質問コーナーでマイクを離さない自称「シニアの生き方評論家」には、仕事柄「高齢者様々」の私でも頭が痛いのに、いわんや普通のママさんをや。

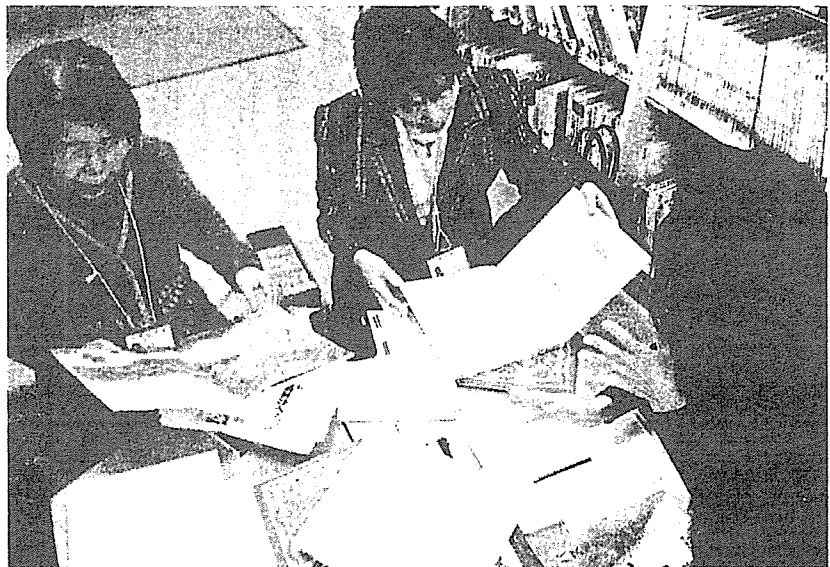
こうした「高齢者」社会負担」といった偏見を払拭し、なおかつ他世代から敬愛される存在になるには、高齢者自身がその社会的役割を周囲に提示する必要がある、これこそが子育て世代との信頼関係回復の一助になりうると考えたのです。

次世代育成成型研究となる 高度な知的活動「読み聞かせ」

一方、第二のコンセプトである世代内交流とは、「高齢者ボランティア同士のグループ活動」を意味します。その狙いは、ボランティア活動で知り合う仲間による「社会的サポート・ネットワーク」を広げ、それを高齢者ボランティアの心身の健康に寄与させることです。こうした考えは、すでに国内外の先行研究で数多く実証されています。

しかし、それらの研究で指摘されている「効果」は、もともと閉じこもり傾向にある

「読み聞かせ」の原点は、絵本選びである。「りぷりん」と活動開始後、週一回以上図書館に通ったボランティアは76%、書店に通った人は40%に上る



絵本を熟読して 読み聞かせの 練習をすることは、 高度な知的活動

るような 社会的サポート・ネットワークの乏しい人に期待されるものです。

ところが、一般公募で集まるような参加者というのは、心身ともに活発すぎるくらいの人が多いものです。「りぷりん」では、閉じこもり予防よりも、むしろ突っ走り予防のためのグループワークの重要性を実感しました。さらに、プログラム開発において「知的能動性」を末永く賦活するため、「生涯学習」を第三のコンセプトとしました。

そうしたコンセプトを考えたうえでプログラム内容を模索した結果、「絵本を楽しむ」を題材とすることにしました。というのは、本来子どもを対象とする絵本

は文字も大きく、読書に馴染みの薄い高齢者の初心者にとっても比較的親しみやすいと思われ、しかも古今東西無数に出版されている絵本のなかから、子どもにとって望ましい絵本を吟味し、熟読して読み聞かせの練習をすることは、高度な知的活動になる、と考えたからです。つまり、「絵」が醸し出す魅力と、短文であるがゆえに研ぎ澄ま

された「文章」は、大人をも魅了するはず、という確信があったのです。

そして、これら三つのコンセプトを包括するプログラムとして、子どもへの「絵本の読み聞かせ」を題材とした次世代育成支援型介入研究「REPRINTS」(りぷりん)を開始したというわけです。なお、「りぷりん」は、厚生労働科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業平成十六年長寿03「高齢者の社会参加・社会貢献の増進に向けた介入研究」(主任研究者「新開省二・東京都老人総合研究所」の一環として行っています。

それでは、これから何回かにわたり、「りぷりん」の一年六か月の歩みのなかから得られた教訓や経験とともに、シニアに与えた短期的な効果についてご紹介していきます。

◎参考文献

- 1) ロバート・バトラー『高齢者はバイオニア』ロバート・バトラー、ハーバード・グリーンソン編(岡本祐三訳)。プロダクティブ・エイジング。東京：日本評論社、1998；1-19。
- 2) Rowe JW, Kahn RL. Successful aging. Gerontologist 1997;37:433-40.
- 3) 藤原佳典、杉原陽子、新開省二。ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義—。日本公衛誌 2005；52：293-307。
- 4) Fried LP, Carlson MC, Freedman M, et al. A social model for health promotion for an aging population: initial evidence on the Experience Corps model. J Urban Health 2004；81:64-78.
- 5) Palmore EB, Branch L, Harris DK, eds. Encyclopedia of Ageism (Religion and Mental Health). New York: Haworth Pr Inc, 2005.

高齢者による
学校支援ボランティア
「りぷりんと」の
現場から

団塊・シニアボランティアの エビデンス

東京都老人総合研究所
社会参加とライフプロジェクト
研究チーム

藤原佳典

研究機関と自治体のお付き合いは まるで恋愛のように

今回は、シニアによる学校支援ボランティア「りぷりんと」研究の立ち上げに向けた準備段階のエピソードを、理論的かつ本能的(?)にお話したいと思います。

学会場などの場で、初対面の人に「〇〇市で新しい協働事業を進めています」と話すと、必ずと言ってよいほどこう尋ねられます。「その市を選んだきっかけは?」と。そもそも、われわれ研究機関(研究所や大学)と自治体との付き合い、いやいや協働事業というのは、恋愛にたとえることができます。たとえば、学会などでの発表を見聞きし一目惚れして、フロアまで追いかけて猛烈アタック(ダンスパーティー告白派)する場合もあれば、あらかじめ偉い先生に協働事業に関する条件やプロフィールをお

伝えしておいて、「どこかよい自治体はないでしょうか?」と紹介してもらった場合(お見合い派)もあります。しかし、実際の協働事業のきっかけというのは、以前、研修会などで一緒だった中間管理職の二人が別の会合で再会して意気投合、翌日にメールで告白(?)するといったナチュラル派が主流なのではないでしょうか。

さて、どんな出会いにも共通しているのが、最初はプロポーズしたほうがデート代を全額負担するという法則です。協働事業も同様で、次第に付き合いが深まるにしたがって徐々に割り勘へとシフトしていくことが多いようです。そして、別れにも、実にいろんなパターンがあります。通常、親同士が理解を示して公認の仲になる(首長と学長・所長間で文書が取り交わされる)と、当面の交際は保障されます。しかし、継続・更新の道は必ずしも平坦ではありません。お互いの価値観が違ってきたり、遠

距離恋愛が災いしたり、最近では新しいパパが二人の恋仲を引き裂く「市町村合併エレジー」という物語も耳にします。

「学校には馴染みがなくて……」 つれない返事にもめげずにアプローチ

現在、私たちが推進している「りぷりんと」研究の対象地域(フィールド)は、特徴の異なる三地域です。大江戸の「へそ」で日本橋、銀座、もんじゃ焼きの月島で有名な商業地、東京都中央区(以下、中央区)、首都圏のベッドタウンで新商品のサンプリング実験の候補地になることが多いとされる川崎市多摩区(以下、多摩区)、そして、地方小都市ながら太閤秀吉をはじめとした戦国時代の武将たちが活躍した舞台として脚光を浴びる観光都市、滋賀県長浜市(以下、長浜市)がそのフィールドです。ちなみに、二〇〇四年四月一日現在の人口は、

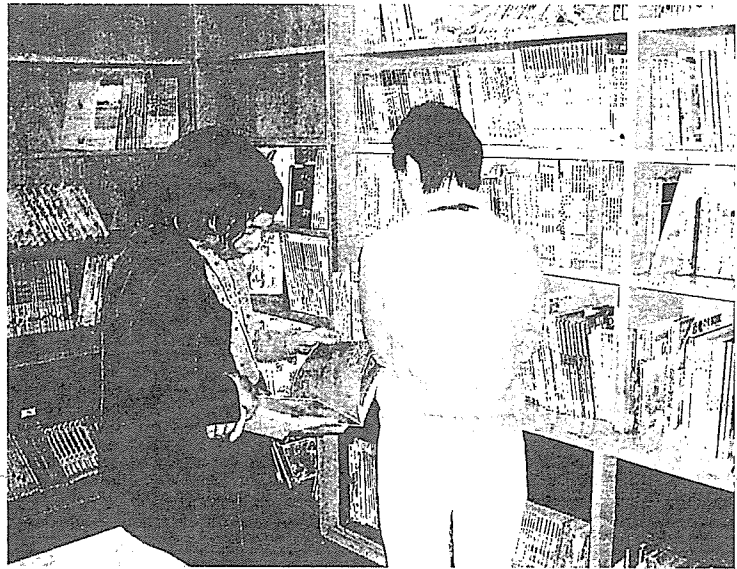
それぞれ九万一九〇人、九万三、九三四人、六万二、〇三一人です。

この「りぷりんと」研究の三つのフィールドと私との出会いも、三者三様でした。まず最初の出会いは、長浜市でした。ある研修会がご縁で二〇〇一年から、健康日本21地方計画「健康ながはま21」の策定委員を拝命していた私と保健センターの保健師たちは、住民のワーキンググループやニーズ調査を通して、「地方計画のツボは結局、高齢者と子育てですな」とあたり前の議論に時間を費やしていました。そんななか、「健康ながはま21」策定のゴールである二〇〇三年度末を目前に、私は六か月間のアメリカ留学の機会を得ることになり、後ろ髪を引かれつつも渡米することになりました。留学先であるジョンス・ホプキンス大学では、高齢者による学校支援プログラム「Experience Corps®」(本誌二〇〇四年二月号〜二〇〇五年三月号連載「研究員が見

たおもしろアメリカ留学記」(参照)を学び、これからは「高齢者vs子ども」といったそれぞれの政策充実のために互いに税金を奪い合うような対立の構図ではなく、「高齢者&子ども」つまり「Win・Win(一石二鳥)」が主流にならなければいけないと確信しました。そして帰国後、「健康ながはま」のヘルスプロモーション事業の目玉の一つとして、「りぷりんと」を提案したところ意気投合し、保健師たちはその実現に向けて、教育委員会をはじめとした行政内部や住民組織に対し、入念な下調べと根回しを始めたのです。

着実な事業推進に不可欠な根回しに着手するとはさすがと、行政職員に感服していましたが、思い立ったら待ち切れない私とはとにかく近場(首都圏)にもフィールドをつくりたいと考え、知己のあった二、三の自治体にもラプコールを送りました。しかし、交流のあった行政部署は仕事柄、高齢保健福祉課や介護保険課に偏っていました。案の定、「面白いですね。でも、うちは介護予防事業で手一杯なので……」「高齢者&子どもへの取り組みは大切ですね。でも、学校(教育委員会)とのお付き合いはどうも馴染みがなくて……」と、ヘルスプロモーション・プログラムの主旨には賛同してもなかなか実践に踏み切れない、余裕なき現場の実状に直面したのでした。それにもめげず、名刺ホルダーを開いて

学校の図書室の、気軽に貸し出してもらえるのも、ボランティアの特権。戦争中に幼少期を過ごした60代のボランティアは、「本のない時代」に育った。絵本への憧れと執着は計り知れない



「高齢者VS子ども」ではなく 「高齢者&子ども」、 つまり「Win・Win」で なければいけない

次なるバトナーを探しましたが、なかなかこれという自治体にヒットしません。そんなある日、「Experience Corps®」の本拠地であり、留学先であったジョンズ・

ホプキンス大学のあるボルチモア市についてインターネットで検索をしていたところ、日本の姉妹都市が川崎市であることがわかりました。ともに、人口一〇〇万人の港湾都市で下町と山の手が混在するなど、地域性がよく似通った都市です。灯台下暗しとはこのことで、川崎市多摩区には私も講演会などで何度もお邪魔していました。しかも、川崎市はヘルスプロモーション事業の先進地域で、行政がサポートする住民の自主グループ活動が盛ん。「これや!」と知り合いの保健師に相談したところ、すぐに興味を示してくださり、何とかスタートに漕ぎつけることができました。

「読み聞かせ」安・近・深」 高齢者、学校、子どもにメリット

とはいえ、まだまだ大きな難題が二つ残っ

ていました。一つは、高齢者ボランティアの内容をいったい何に絞るかという点と、後述のように「りぷりんと」のメインテーマを絵本の読み聞かせに絞った後で、その「業界」にどう食い込んでいくかという問題です。

「Experience Corps®」では、高齢者ボランティアによる学校支援の内容が実に幅広く、算数や読み書き、図工などの授業サポートや図書管理、さらにはカウンセリングや放課後の遊び相手など、多岐にわたります。しかし、高齢者ボランティアという観点からも、学校支援ボランティアという観点からも、アメリカに比べてまだまだ後進国である日本では、ボランティアプログラムの選択肢が限られてしまいます。ボランティア側の食いつきと学校側の受け入れを考え合わせると、あまり敷居の高いものではむずかしいし、かといって、単純作業では知的好奇心を揺さぶらないし……とモヤモヤ考えていました。

そんなある日の真夜中、六畳一間に子ども三人と妻とアイリッシュセッター(大型犬)と猫が眠っている隙間に、セメントのように入り込んで眠る私の背中がしばしば冷たい異物を触知したのです。仮面ライダーのビニル人形と硬い表紙の絵本でした。子育てに奮戦する妻が毎夜、子どもを寝かしつける際に読み聞かせた絵本が「つわものどもが夢のあと」よろしく散乱していた



山崎先生の講演準備を通して、筆者は企画者の苦労を初体験した。アナログの講演は真剣勝負、スライドによるゴマカシは効かない

のです。改めて家のなかを見渡すと、絵本だらけ。しかも、ほとんど地元の図書館から借りてきたもの（安＝無料）ばかり。にもかかわらず、オヤジが読んでも結構面白いし、考えさせられるものばかりでした（深＝知的好奇心をくすぐる）。そう話すと、妻が長男の通う小学校（近＝生活圏内）で、絵本の読み聞かせボランティアをはじめたと言うではありませんか。「絵本は無限に種類があつて、選ぶのにひと苦労」と蘊蓄をたれる妻に、年を重ねた四〇年後の姿が一致し、「絵本の読み聞かせ＝安・近・深」というキーワードが脳裏に浮かび、「これや！」とテーマを決定したのでした。

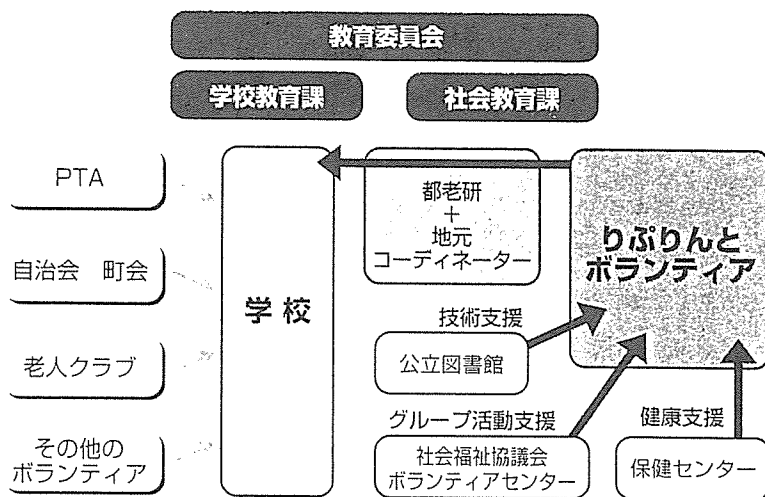
テーマが決まった後は、「読み聞かせ」をだれに監修してもらうかが問題となりました。商売柄、健康や高齢者の業界には明るい私ですが、絵本や子どもの業界は対極の世界であり、妻に頼るしかありません。「だれぞ、ええ先生おらへんか？ 年齢は六五歳以上で、高齢者の魂をガンガン揺さぶるような先生や」と尋ねたところ、自称・他称の専門家が乱立する現代においては、絵本業界もご多分に漏れず、あちこちで「センセイ」が群雄割拠しているということを知りました。そんな、監修者をだれにしようかと頭を痛めていた二〇〇四年二月のみぞれ降る土曜日、近所の小学校で絵本の専門家による講演会があることを聞かされ、行ってみることにしました。ADL（日常生活動作能力）が極めて低い（？）七歳、五歳、二歳のわがわんぱく男児を三人連れて、定刻どおりに移動することはほとんど不可能です。この日もまた、玄関で一五分のロスタイム、その後、兄弟げんか、忘れ物、トイレ……で二〇分も遅刻して会場に到着しました。子育てママに熱狂的な

ファンが多いという先生の講演会です。で、会場を見渡しても、オヤジといえ、奥さんに引つ張って来られたパパが二、三人いるだけです。妻と子どもの陰から見えたその講師は、見事な白髪にピンと背筋が伸びてうす紫色のスーツが似合う、和光大学講師の山崎翠先生（なかよし文庫主宰）でした。絵本を題材に愛、平和、子育てについて熱く語るその姿に、ピーン！ 三度目の「これや！」講演後、即座に演壇に駆け寄ってラブコールをし、控え室の前まで追いかけていつ、取りあえず交渉は成立しました。

読み聞かせが過去の自分に再びエンジンがかかるガンリンとなる

さて、もう一つの難題とは、都老研（東京都老人総合研究所）の宿命というべき、都内にフィールドを持つ、ということ。後日、監修を引き受けてくれた山崎先生に

図「りぶりんと」ボランティアと学校の重層的な支援体制



教育委員会の組織構造は、学校教育部門と社会教育部門に大別される自治体が多い。一般に両部門の関係は、必ずしも連携が十分とは言えないようである。厚生行政における医療部門と保健部門の関係にたとえられるかもしれない。

していました。でも、「りぷりんと」の舞台は学校です。敵陣に乗り込む絶好の機会ですし、ヘルスプロモーションの信念からいって、多様な行政部門と連携することもまた、パイロット研究としての「りぷりんと」の使命ではないかと思ひ直しました。そして、社会教育課との協働を進めていくことにし、粘り強く説得して見事、交渉成立となったのです。もともと本音を言わせてもらいますと、彼のデスク周りの私物の書物やファイルの背表紙に書き込まれた「事務職らしからぬ」タイトルに私と共通する「匂い」を感じ取れたことが、協働を決めた最大の理由かもしれません。

こうしてトントンと話が進み、交渉開始が最も遅かった中央区が二〇〇四年五月に先陣を切って、「りぷりんと」ボランティア募集イベントを開くことになりました。広報誌や回覧板などにより集まった五〇人のシニアの前に、山崎先生が熱弁を振るってくださいました。これまで講演といえば、液晶プロジェクターで簡潔なスライドを使って、住民に知識を提供する理系的プレゼンテーションしか頭になかった私にとって、両手を使ってこみ上げるようなジェスチャーを入れ、絵本を手に高齢期の人生や役割について語りかける山崎先生の、極めて文系的なプレゼンテーションはカルチャーショックでした。参加者もどんと引き込まれ、七〇歳代と見受けられるご婦人たちがあちらこちらでハンカチで目頭を押さえているではありませんか。私は、臨床医時代に患者さんの家族としてこぼされた悲しみの涙以外に、感情溢れる涙を流す高齢者の姿を見たことがありませんでした。

ボランティア研修生の調査から頼われる 新たなシニア像



放課後学童クラブでの「読み聞かせ」後の交流の1コマ。大半が孫がいない、または別居している「りぷりんと」ボランティアにとって、子どもとの間合いの取り方はむずかしい。コミュニケーションの上手い下手は、交流頻度に依存する

ちまたの高齢者施設では、近所の幼稚園児が慰問し、歌を披露して高齢者が感動するという伝統的な世代間交流がまだ主流のようですが、それはあくまでも受身の感動です。山崎先生の基調講演を聴いて流れた高齢者の涙は、過去の自分にエンジンをかけ、これから再び発進するぞという、プロダクティブな感動の「ガソリン」であつたと確信しました。

その後、多摩区と長浜市でも順次、同様の募集イベントを展開しました。そして、第一期「読み聞かせ」ボランティア研修生のうち、中央区二七人、多摩区二一人、長浜市二一人の計六九人が研究協力モニターとして参加してくれることになり、事業評価（健診、アンケート、レポート

など）に賛同してくれました。

ベースライン健診の結果を見ますと、ボランティア研修生の特徴は三地域でそれほど違いはありません。平均年齢は六八歳で、男性が二二%、平均就学年数は一三年で、居住年数は三七年、生活機能は老研式活動能力指標のIADLで満点1)と高く、七八%が過去にボランティアの経験があるという人たちでした。つまり、子育て時代に地域に定着した、比較的若く、高学歴で元氣な高齢者だと言えます。これは、ボランティア先進国アメリカの先行研究におけるボランティア参加者の特徴とよく似ています2)。一方、子どものいない人は一八%、孫のいない人は四二%という数値からは、従来の血縁によらない世代間交流を求めるシニア像が窺われました。

さあ、いよいよ食育でも体育でもない、生活モデル型「りぷりんと」の読み聞かせボランティア養成セミナーが始まります。

この取り組みは、厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業 H16・長寿・031「高齢者の社会参加・社会貢献の増進に向けた介入研究」（主任研究者 新開省二）の一環として行っています。

◎参考文献

- 1) 藤原佳典、他、自立高齢者における老研式活動能力指標得点の変動、日本公衛誌2003・50: 360-367.
- 2) 藤原佳典、他、ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響―地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義―、日本公衛誌2005・52: 203-207.

高齢者による
学校支援ボランティア
「りぷりんと」の
現場から

生涯学習は百花繚乱、研究者も にわか営業部長として真剣勝負

梅雨明け間近になると、昨年の夏の日差しがガンガン照りつける、猛暑の「りぷりんとボランティア養成セミナー」（以下、セミナー）を思い出します。まさしく、生涯学習に対するシニア魂を見たといっても過言ではありません。今回は、そんなセミナーでのエピソードを中心に、高齢者と生涯学習についてお話ししたいと思います。

都老研（東京都老人総合研究所）のOBで大学の教員に移籍した関係者に会うと、「土日曜日はオープンキャンパス、夏休みもシニア向けのセミナーで大変」とよくこぼしています。少子化の影響を受けた大学は、サバイバル戦略の一つとして、現役社会人やシニア世代を学生として取り込もうと奮戦しているためです。文部科学省のデ

団魂・シニアボランティアの エビデンス

ータによれば、二〇〇四年度には全国の大学を合わせると、年間二万講座以上、一二〇万人近い受講者が公開講座に参加しているようです。わが都老研でも最近では、「研究成果を直接、一人でも多くの住民に還元されたし！」をモットーに、昨年度は年間九本もの大きな公開講座を開きました。

昨年十一月には私たちの研究チームも、「りぷりんと」のお膝元である中央区で公開講座を開くことになりました。都心のど真ん中といえども、銀座の公会堂に数百人の聴講者を集めるのは容易ではありません。今回の企画は、新井主事（前号参照、中央区社会教育課所属）が全面的に応援してくれることになりましたが、イベントのプロである彼でも苦い顔をしました。というのも、テーマが「地域への軟着陸―高齢期の社会参加・いきがいと健康」と「正直言って地味―」であるうえ、「住民はノウハウやテクニクなど直接、お土産（メリ

ット）として持って帰れるものを望む」という点と、「都心では大きな講演会が競合しすぎる」という点から、そのニーズに合致していないように彼の目に映ったからです。たしかに、類似のテーマであれば、五人規模までの研修会ではかなりウケがよかったのですが、銀座の公会堂というオオ箱には、中央区の超ビッグネーム・日野原重明先生（聖路加国際病院理事長）でもゲストにお招きしなければ、そぐわないかもしれせん。

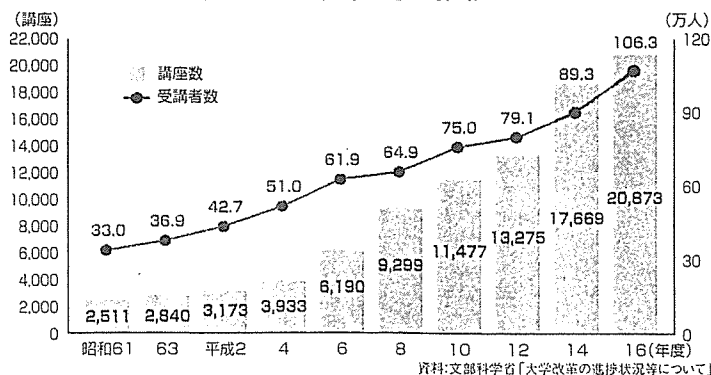
そこで、今回の講演会のにわか営業部長となった私は、軟着陸どころか墜落のプレッシャーに悩まされながらも集客作戦を練ることになり、結局は人海戦術をとることになりました。メディアへの売り込みはもちろん、りぷりんととの関係者や地元の核となる人物にチラシと整理券を渡し、住民サークルの活動紹介コーナーもプログラムに入れて、固定票を獲得。うとは、当日の天

気だのみ……。バブル期に脳天気学生だった私は、学園祭の直前には教室の最後列に潜んでディスコパーティのチケットに連番

東京都老人総合研究所
社会参加とヘルスプロモーション
研究チーム

藤原佳典

図1 大学公開講座の実施状況の推移



公開講座の人気はうなぎ登り。講師としての研究者の出番も急増中

を押し、手書きのチラシづくりの内職をしていました。お客さんの年齢が五〇歳は跳ね上がり、BGMがユーロビートからクラシックに変わったこと以外に、何も変わらない私のことを家内は「生涯現役」ならぬ「生涯学生」と揶揄しました。

とはいえ、当日はお陰で五〇〇人以上が来場され、盛り上がりました。しかも、地味なテーマだからこそ、関心のある人が参加したと感じられました。閉会後にはロビーで、「シニア〇〇研究会」的なNPOやサークルに属する多くの賛同者から勉強会のお誘いを受けました。地味なテーマであっても大きな講演会は、研究者が現場のナマの活動家とネットワークを組む機会を与えてくれるオトナのパーティーなのでした。

生涯学習の語源を調べると、そのルーツは一九六五年にパリで開かれたユネスコ成人教育推進国際委員会において、社会の変化に対応した教育体系を構築する必要性を訴えるために提案された新しい基本理念「Lifelong Integrated Education（直訳…生涯にわたる統合的な教育）」に行きあたります。わが国では当初、「生涯教育」と訳されましたが、のちに教育を提供する側からではなく、学習する側から捉えた「生涯学習」におき換えられるようになりました。専門家の視座ではなく、住民の視座でという点では、ヘルスプロモーションにおける健康教育と同じ発想だと言えるでしょう。

子どもに溶け込むには 時間がかかる。しかし、 この未知なる チャレンジが 「りぷりんと」の狙い

インストラクターは 金のわらじをはいて探せ！

「りぷりんと」では、参加希望者に対し、まずはじめに、モデル研究であるため、ボランティア活動の効果を科学的に評価していく目的があることを説明し、健康モニターへの協力を依頼します。そして、同意をいただいた方はまず、ベースライン健診を受けます。この健診は、基本健診のような生活習慣病探しのための健診ではありません。認知機能、体力測定、心理・生活調査といった老化予防のための健診です。全部で二時間ほどかけて詳細に高齢者のいきいき度をほかり、一年後の変化を調べます。同時に、各地域ですでに興味やサークル活動をしている同年代の元気な高齢者も募集して、同じ健診を受けてもらい、対照群として研究に協力していただいています。



セミナー後半は、実地トレーニング。子どもとの距離や絵本の角度などをイメージしながらのリハーサルに余念がない

次いで、研修生となりボランティアアデビュアする前に、三か月間のセミナーを受けてもらいます。公立小学校や幼稚園というところは、タイトな年間スケジュールに従ってカリキュラムが組まれており、二学期からのデビューを目指すならば、どうしても六月からの真夏のレッスンは

必要となります。そのため毎週二時間、近くの公民館や保健センターで、ボランティアインストラクターによる指導が続くことになるのです。

対象地域が東京都中央区（都心部）、川崎市多摩区（住宅地）、滋賀県長浜市（地方小都市）と、地理的、社会文化的にも異なることから、プログラムの詳細はインストラクターに委ねましたが、三地域に共通する内容として、核となる「絵本・読み聞かせに関する基本的知識・実技」、「ボランティア論」、学校や幼稚園を視察して現役教諭から「現代の子供と子育て事情」を学び、健康モニターの健診結果をもとに、「高齢期の健康づくり」の学習を盛り込むことにしました。これらのプログラムだけでも、ミニ・シルバール大学に匹敵するのではないかと自負しています。

インストラクターは、研修生の技術だけでなく、モチベーションをどれだけ高められるかが問われる、事業成功の可否を占うキーパーソンです。中央区では、新井主事の紹介で、日本橋図書館を定年退職されたばかりのベテラン司書の植田たい子氏を即ゲットしました。彼女は児童図書に半生をかけてきたと言ってはばからない、絵本の鉄人です。絵本業界には、読み聞かせに方言はタブーとか、外国もののしか認めないという石頭専門家が少なくありませんが、エビデンスなきタブーは公衆衛生人として否

定しました。その植田氏の茨城なまりは温かく、ご本人も方言を文化として大切にされています。地方出身者が多い大都市では、住民のルーツを大切にするというポリシーも必要だと実感しました。

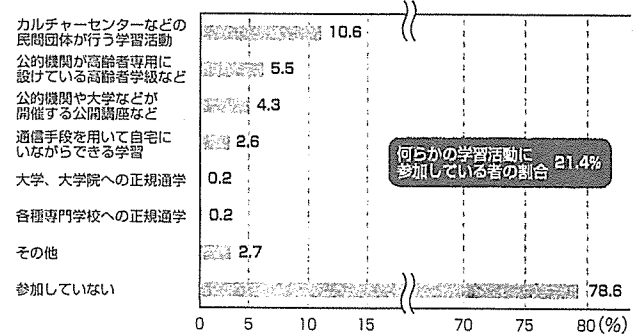
一方、多摩区の巨匠は、女優経験があり、子育て時代から絵本の研究をされて、地元の小学校ではPTA会長や多種多様なボランティアを歴任・育成されてきたカリス・マダム熊谷裕紀子氏。学校や現役ママの信任が厚い地域の顔です。私は、彼女のカバン持ちをして同区の布田・中野島という界隈を歩くことがしばしばあったのですが、半径一キロ以内で彼女にあいさつするのは、不審者とネコくらいでした。コミュニティが崩壊したと言われる昨今、一〇〇万都市川崎市にこんな「顔」がいるのか!?と正直驚かされました。残る長浜のインストラクターは白一点、長浜市立図書館で勤務されてきた河合正博氏です。「仏の河合」と呼ばれ、由緒あるお寺の住職と市職員を兼務される、落語家風の師匠です。

それぞれ行政の関与の程度も異なっていることから、セミナーの進行やマネージメントの担当も三地域とも異なっています。中央区ではエフォート（仕事の配分率）の九五%を私たち都老研スタッフが、そして多摩区では保健福祉センター保健師と半分半分、逆に長浜は遠方であることから九五%を保健センター職員が担いました。

セミナー後半には、研修生を六〜一〇人程度のグループに分けました。グループ活動を通し、研修生間の仲間意識を高めることを狙ったことです。そして、研修生の間で実際に絵本を音読し合ったり、絵本の内容や表現法に関してディスカッションを重ねました。また、小学校、幼稚園、児童館などの見学を行うことで、セミナー終了後に、スムーズに実地ボランティア活動に移行できるような態勢づくりにも努めました。孫と同居している研修生は少なく、何十年ぶりに子どもの世界に足を踏み込むことになる彼らにとって、すべてが異次元です。グレーや茶系のシックな出で立ちの高齢者が、イエローやピンク、ブルー、バステルカラーの絵や工作に包まれた教室に溶け込むには、時間がかかるかもしれません。しかし、この「未知なるチャレンジ」が「りぶりんと」の狙いです。一年後の彼らの変貌に期待をしました。

インストラクターから宿題を出され、セミナー後にそのまま図書館へ直行という人も少なくありません。ダンベル振り回す介護予防はいやだけれど……と言った研修生が総重量が数kg以上にはなるでしょうに、絵本を何冊も抱えて帰って行くのです。いくつになっても好きなこと・楽しいことは没頭できるもの——。これこそ生涯学習だと感服しました。三地域とも、セミナー会場まで歩いて、ぶらわれる研修生はほとんど

図2 高齢者の学習活動への参加状況



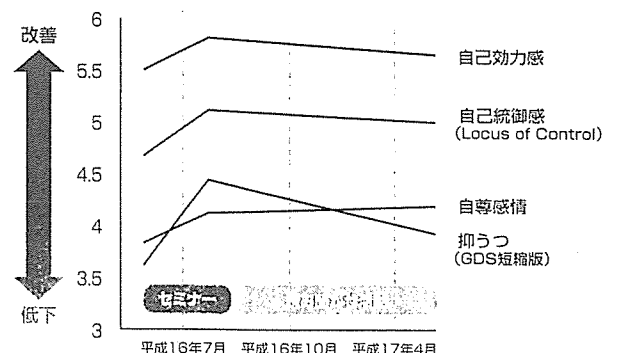
学習活動に参加している高齢者は、全体では20%に過ぎない。参加する人はリピーター？ 無関心な人と二極化が進むのか？

高齢になっても学べる自分 それが元氣と自信の源となる

いません。いくらアクティブでもそこは高齢者、真夏に脱水は禁物です。絵本は忘れてもペットボトルは忘れずに。ハラハラどきどきの三か月間でありました。

セミナー修了後、心理的項目を中心とした中間評価を行い、ベースライン健診（二〇〇四年六〜七月実施）と比較しました。アンケート項目は、米国の先行研究¹⁾で高齢者のボランティア活動と関連が深いとされる自尊感情²⁾、抑うつ度³⁾、自己効力感⁴⁾、自己統御感（Locus of Control）、以下

図3 「りぶりんとボランティアの心理的効果のあらわれ」



「りぶりんと」のセミナーは、高齢者の心理状態を一時的に活性化した。今後、持続するの？ 死別や離別といった負のライフイベントが起こりがちの高齢期に、ボランティア活動の影響は？ 現在、その推移を追跡している

LOCCと略す）の四つです。自己効力感についてはセミナー前後で得点の変化は見られませんが、自尊感情、抑うつ度、LOCCにおいては、セミナー前後で有意に得点の改善が見られました。その効果は多少弱まったものの、九か月後の第二回健診においてもりぶりんと開始前よりは好成績を維持していました。三つの心理尺度の得点変化が見られた理由として、セミナーの何が関与したのでしょうか？
従来の高齢者の社会参加というところ、「閉じこもり予防」→「地域の茶の間のサロン」というステレオタイプで語られることが少なくありません。しかし、この種のサロンでの話題の中心は「日常のよもやま話」、

ネタがつきることが多いものです。

ところが、セミナーにおけるコミュニケーションは「読み聞かせの技術向上・望ましいボランティア活動を始めるため」という明確な目的を持っています。膨大な数に上る絵本のなかからよい絵本を選定し、読みこなすには、インストラクターや仲間同士の情報交換が必須であり、話題に事欠くこともありません。また、常に仲間とのディスカッションに対応できるには、セミナー時以外での自習（自宅での予復習や図書館・書店通いなどの活動）を要します。

これらの活動すべてがまさに「生涯学習」であり、それを継続しえたことに対する満足感や達成感こそが、心理尺度の改善に作用した可能性が示唆されます。デビュー後、訪問先の校長たちは、「高齢になっても学ぶ姿勢を自然と子どもたちが学んでくれるのではないか」と口をそろえました。おそるべし、高齢者パワー——。

甘いだけが高齢者の社会参加ではない セミナーは社会的責任を学ぶチャンス

しかし、そもそもセミナーの意義は、生涯学習にあるわけではありません。高齢者の社会活動の多くが趣味のサークルなどの自己完結型のものですが、「りぷりんと」はボランティア活動です。常に訪問先である学校があり、その主人公は高齢者（ボラン

児童館を視察する研修生。扉の向こうは高齢者の牙城——シニアセンター。同じビルに同居していてもこれまで交流はなかった。学童クラブと学童疎開？で高齢者にとっては未知なる世界のオンパレード



活動すべてが 「生涯学習」。 継続しえた満足感や 自己の達成感が 心理尺度の改善に作用

ティア）ではなく、子どもです。つまり、子どもの代弁者である教諭や保護者のニーズに応えることが原則です。最近では、全国の多くの学校でボランティアが活躍しています。総合的学習の導入以後、すでに学校ボランティアは、数の時代から質の時代と言われているます。高齢者と子どものふれあいだけでは、従来の老人クラブ活動と違いがなく、学校側にとっての魅力がない、とまで言われることもあります。いやしくも貴重なカリキュラムのなかの一分をもらって活動していることの意味を真摯に受け止めてほしい、とインストラクターはボランティアに檄を飛ばします。ボランティアは常に、絵本の知識や「読み聞かせ」の技術、子どもへの接し方など、一定の水準をクリアすることが望まれるというわけです。

無断欠席や遅刻の続く人、住民としての権利を主張しすぎる人、ふた言めにはプライバシーと連呼するクレーマー、何でも事務局に依存してくる人……。行政職員なら、一度は直面したであろう困った人たちははつきり言ってボランティアには向いていません。子どもやほかのボランティアにとって、百害あって一利なし。三か月も付き合っていると、大抵のキャラクターはわかります。私は「りぷりんと」に着手するまで、高齢者の社会参加については性善説

を疑いませんでした。しかし、年齢にかかわらずなく、ボランティアに関心があるとか元気であるということ、人格者であるということは別物だ、と改めて体感しました。三か月間のセミナーは、いわば社会的にお行儀の悪い人のスクリーニングの役割も担っている、と言えそうです。ボランティアは、社会的責任の重い活動でもあります。気の弱い私も第二期募集以降は、お行儀の悪いお客さんには「堪忍とすえ」と京都の舞妓よろしく丁寧にてもてなしながらも、ほかのお店（サークル）を紹介する術を習得したのでした。

この取り組みは、厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業H16・長寿・031「高齢者の社会参加・社会貢献の増進に向けた介入研究」（主任研究者新開省二）の一環として行っています。

◎参考文献

- 1) 藤原佳典、杉原陽子、新開省二、ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響——地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義——日本公衛誌2005；52：293-307。
- 2) 末永俊郎、社会心理学入門、東京：東京大学出版会1987、211-214。
- 3) Nino N.Kawakami N.Imazumi T.A Japanese translation of the Geriatric Depression Scale. Clin Gerontologist 1991；10：85-87。
- 4) Sherer,M.,Maddux,J.E.,Mercandante,B.,Pritce-Dunn,S.,Jacobs,B.&Rogers,R.W.The self-efficacy scale:Construction and validation. Psychological Reports 51,663-671。
- 5) 鎌原雅彦、樋口一辰、清水直治、Locus of Control 尺度の作成と信頼性、妥当性の検討、教育心理学研究1982；30：302-7。

高齢者による
学校支援ボランティア
「りぷりんと」の
現場から

学校デビュー 六八歳にして教壇に立つ

二〇〇四年十月のある朝、川崎市の受け入れ先小学校での全校朝会では壇上に六人の新入生（？）が並んでいます。平均年齢六八歳、でも全員ガチガチです。私にとっても忘れられない、「りぷりんと・かわさき」のおむすびチームのデビューの日です。晴れの一期生のデビューを見守る私は、ウルウル、一人『プロジェクトX』してました。「りぷりんと」では、活動場所や勉強会の仲間で小グループを作っており、グループ名をつけています。「おむすび」の由来は、ボランティアさんがミーティングでわいわい言いながら名づけました。もとは子どもとシニアボランティアを結ぶという意味ですが、何ごとにもステレオタイプの認識を抱きがちな日本の子どもたち

団魂・シニアボランティアの エビデンス

東京都老人総合研究所
社会参加とヘルスプロモーション
研究チーム
藤原佳典

に、高齢者との交流を通して人間の多様性を感じ取ってほしいと念じており、またアンチ・ハンバーガー党のプロデューサー藤原にとつては、涙がちよぎれるようなネーミングです。ちなみに長浜地域のチーム名は「じーばーぼこぼこ」と言います。じいちゃんとはあちゃんがやって来ると、お話がポコポコ飛び出るんやで、というのが由来だそうです。

さて、児童の拍手に見送られて、校長室に集まったボランティアさんは、校長先生からお礼と注意事項を聞いたのち、図書室で教頭先生に顔写真を撮影してもらい、ボランティアのネームカードが出来上がりました。川崎市の中でも、梨畑が残るこの地域は、三〇年ほど前からベッドタウンとして開発されました。「おむすび」ボランティアの多くの方はこの小学校に隣接する高層マンションに住んでおり、地主系住民に対する、いわ「新住民と言えます」。

子育てをはるか昔に終えた人や子どももないご夫婦もメンバーで、懐かしさに浸りながら小学校を見下ろして来たそうです。

大人にこそ

「総合的な学習の授業」が必要

りぷりんとのフィールドは、主に公立小学校と幼稚園、児童館・学童クラブです。なかでも公立小学校と幼稚園との共同事業は、いろんな意味で私にとつて新鮮であり、そこでのシニアボランティア活動にこぎつけるまでには紆余曲折がありました。一昔前までは、学校に教職員と保護者以外の大人が出入りすることは、運動会や入学・卒業式の来賓以外には滅多にありませんでした。しかし、少子高齢化の影響は学校教育の現場にも大きな影響を与えました。児童の減少に伴う学校の小規模化は、教職員の絶対配置数を減少させました。少数の教職

員集団だけで多忙化・多様化する教育課題への対応が必ずしも容易ではなくなってきたため、近年、学校支援ボランティアに注目が集まっています。

とくに平成十年の学習指導要領の改訂に伴い、平成十四年から全国一斉に「総合的な学習の授業」⁽¹⁾が導入されたことが大きな追い風になり、「開かれた学校」化が進まれました。「総合的な学習の授業」とは、「生きる力」の育成を目指し、各学校が創意工夫を生かして、これまでの教科の枠を超えた学習などができると定義されています。

ところが、この創意工夫とできるが曲者⁽²⁾なのです。具体的には、自然体験や地域住民の協力を得ながら、ボランティア活動などの社会体験といった体験的な学習や、グループ学習を通じた問題解決的な学習が積極的に行われています。今まで、「城」として地域から隔絶した感のあった「学校」

注) (1) 地域や学校、子どもたちの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間 (2) 困難理解、情報、環境、福祉・健康など従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行える時間(小学校3年生以上で週3時間程度配分される)。地域の人々の参加による、学習や地域の自然や施設を積極的に生かした学習などの多様な学習が行われる

の中で、教科の指導を効率的かつ効果的に進めるトレーニングを重ねてきた教師に対して、いきなり噂を頼りに、商店街や町会を回り名物おやじに頭を下げて、「あなたの秘伝の技を一時間、子どもに見せてやってください」という職務が増えることになりました。専門性を追究してきた教師をはじめわれわれ大人こそ、総合的な学習が必要というものでしょう。よほどのクリエイターでもなければ、普通のマジメな教師からすると、できるといってもやりたくないのが本音でしょう。私の倅が近所のコンビニで二時間ほど体験バイトをして、コンビニ・オリジナルの「総合的な学習の授業」特製みやげ袋（ロゴ入り鉛筆、メモ用紙とキャンペーンチラシ入り）をもらって帰って来るのを見ると「なんか、ちゃうやろ！」とため息が出ます。

そんな時代に地域のシニア世代の方が、自分から「お手伝いしましょう」とノックしてくれるのですから、学校からすると願ってもない話でした。しかし、そう、過去形なのです。りぷりんとが公立学校でプロジェクトを展開できた報告書的なプロセスについては、保健師や社会教育主事がバックアップしてくれた云々と以前に紹介しましたが、今回は、なぜ、「ボランティアは歓迎された」という過去形なのか？ そのわけを含めて学校攻略の実践編をお話しましょう。

現場はつらいよ 学校は戦場!?

「りぷりんと」研究を立ち上げてから、われわれの保健医療業界と公教育業界とは、実はかなり似通っているのだということを実感させられます。

私はかねてより熱血ドラマの法則と呼んでいるのですが、視聴率挽回の主人公は「またもや刑事、医師、そして教師か——」という奴です。正確に言うなら、ヒーローとは刑事では捜査一課、医師では外科医か救命救急医（間違っても、老年内科や公衆衛生医というのはありません）、また教師も校長・教頭ではなく、バリバリの担任を指します。一人の問題児が脱走するや、残りの患者や児童を放置して、夜まで戻ってこないアツい奴らに視聴者は感動します。

職場から飛び出る以前に、職場自体が世間からかなり飛び出していますが、視聴者や制作者は実際は超ジミな三つの聖職の内幕を知っているのでしょうか？

免許をもらったその瞬間に学生からセンセイに昇格——みんな頭を下げてくれます。患者、生徒という人質を預かっていて、何故か一族に同業者が多い——。しかし、最近ではカルテ開示だ、開かれた学校だ、と騒がれて、取るに足らない不祥事でも、マスコミは鬼の首を取ったかのように攻撃し

ます。倅の小学校の参観日に二、三時間だけ訪問しても、よそゆきの学校生活を見ているに過ぎません。

一方、「りぷりんと」の仕事で、朝から一日受け入れ先の小学校に滞在することがありますが、そこで見るのがナマの公立学校です。三人の子育てでもアップアップの私にとって、五〇〇人の子どもがワイワイガヤガヤとテンション高く集団生活している、一日ケガやトラブルがないなんて奇跡としか思えません。クラスを受け持っていれば、ずっと教室に入りびたり、昼休みも給食指導、部活動の指導に、保護者の相談、会議・会議と超多忙です。朝八時以前から十七時以降でないで電話で話すこともままありません。

文部科学省が二〇〇六年四月に実施した教職員勤務実態調査の試行調査の結果によると、小中学校教師の一週間あたりの超過勤務の平均時間は一人当たり一五時間を超え、持ち帰り残業は約五時間に上り、一週間で六〇時間を超える教員もいるなど、深刻な勤務実態が明らかになりました。もちろん、残業手当はありません。一か月あたりの超過勤務が八〇時間以上と考えると、激務で定評のある小児科勤務医の平均超過勤務（平日超過勤務時間＋夜間当直＋休日直の総計）が八六・七時間であるのと差がないことになります。

りぷりんとでお付き合いのある校長は口

をそろえて、「公立学校は地域の縮図です」と言います。運動会の練習の声がかましいと脅迫まがいの電話をかけてくる近隣住民、学級新聞に子ども顔写真を載せるなど文句を言いつつ、授業参観中に子どもにピースサインをさせて写メールをとりまくる保護者。「なに考えとんねん！」的なエピソードにはこと欠きません。事故、事件、新住民vs旧住民、コミュニティの崩壊……安心・安全の街づくりという公衆衛生のスローガンは、すべて公立学校のためにあるようなものです。

公立学校で派生する問題はどれも社会構造や文化構造の問題であり、国民一人ひとりがそれぞれ責任を負うべき問題であるべきにもかかわらず、その責任を教師に転嫁し、非難することで責任を回避している、と指摘する専門家もいます²⁾。

私は先日、ある校長に子どもが凶悪事件を犯した時に犯人の保護者が登場しないのに、なぜ校長が謝罪の記者会見をするのか？と尋ねました。校長は、「その子家族や家庭をマスコミ報道、世間の中傷・誹謗という二次被害から守るため、学校が矢面に立つのです」と言いました。これまでにトップの謝罪シーンをテレビで見るたびに、組織保身の茶番劇しかイメージできませんでしたが、学校の謝罪には実は深い意味があったのです。

なぜ「りぷりんと」は 公立学校を舞台にしたいのか？

りぷりんとを通じて、こうした公立学校のマゾヒスティックなまでの現実を垣間見るたびに、公立学校をフィールドに研究するということの意義とその戦略が整理されてきました。私立学校では問題児が出ると、「本校の校風に合わないので退学していただきます」と学校側が生徒を選べます。しかし、公立学校は生徒も保護者も選べません。保護者間の社会経済格差は歴然としています。公衆衛生的視点から見ても、虐待・ネグレクト、アレルギーや肥満、欠食、学習障害児への普通学級における特別支援教育など、実に多様な問題を抱えながら毎日の授業は進むのです。

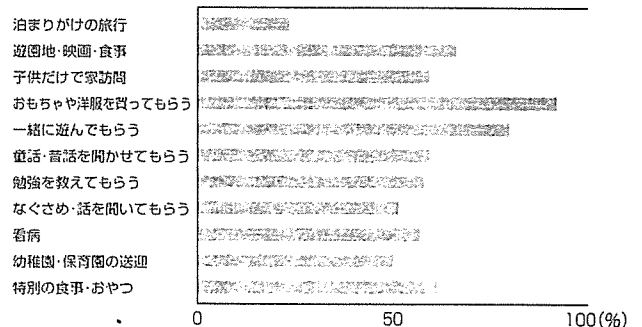
ところで、りぷりんとでは、重点的にボランティアの受け入れを継続してくれている中央区と川崎市の二つの公立小学校で、六か月毎に児童を対象とした追跡調査を行っています。主な目的は、りぷりんとを通じて、児童が高齢者全般に対して抱くイメージがどのように変化するかを調べることです。研究の一部として、まず、りぷりんとを導入して六か月経過した時点で、ボランティアと積極的に交流を持とうとする児童について、りぷりんと活動開始前におけるその特徴（予知因子）を分析しました。

その結果、「低学年」「女子」「幼い時に祖父母等の高齢者との交流経験が豊かであった」「りぷりんとを一か月間試験的に導入した時点で会話を交わす機会があった」ということがわかりました。一方、全児童のうち、過去の祖父母との同居経験とシニアボランティアと交流を持とうとする積極性についても分析したところ、同居経験がある子は二五%しかいませんでしたが、同居経験の有無には関連が見られませんでした。つまり、りぷりんとによる絵本の読み聞かせを通じた世代間交流が活性化するためのコントロール可能な要因は、教師やボランティアなど大人の方から、積極的に児童とボランティアがコミュニケーションをとれるような機会を作ることだと言えます。

例えば、読み聞かせの前後で、教室の机を並び替えながらの短時間でも話を聞いてあげるという姿勢が重要だと言えるでしょう。

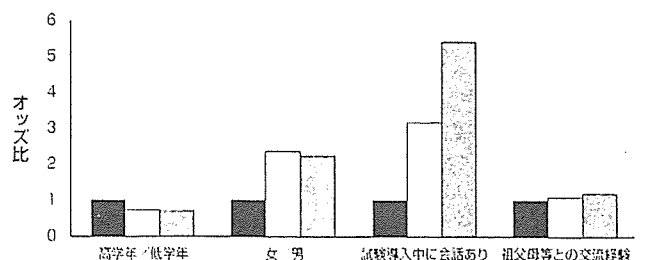
最近では、児童館や図書館などのイベントでも、ママさんボランティアによる絵本の読み聞かせが盛んに行われています。しかし、これらの聞き手はいわゆる「この指とまれ！」で集まった子どもたちです。保健事業の原則は、一般公募で集まる対象者は優等生、非参加者こそハイリスクですよね。その原則は、りぷりんとでも同じです。りぷりんととのインストラクターは、「保護者の読み聞かせボランティアの多くは、無意識に自分の子どもの様子を観察することが

祖父母等高齢者との交流経験



対象2校の1～5年生全児童における幼少期の祖父母等高齢者との交流経験の有無を尋ねた。プレゼントや日曜りの遊びなど、物質的・短期的な交流経験は多いが、泊りがけの旅行やなぐさめってもらう、幼稚園・保育園の送迎など、日常的あるいは濃厚な交流は多くない

6ヵ月後に「REPRINTS」ボランティアとの交流 頻度得点が高いことの予知因子



普通の大人の意識では「世代間交流……あればベターだがなくても困らない」。町会や子ども会等の地域による日常的・自然的な世代間交流にはもはや大きな期待できない。世代間交流には周知の仕掛けが必要である

主な目的となります。逆に、わが子の友だちはわが子の対照群として意識します。学級あるいは学校の児童全体のためにというモチベーションを持つ保護者は少ない」と言います。保護者ボランティアの目にも入らない子どもこそ、コミュニケーションを欲しているのではないのでしょうか？

それに比べてりぷりんとのみならず、地域のシニアボランティアは子どもにとって他人です。一人の子どもだけを観察・評価したりする存在ではありません。子どもの生活背景や能力に関係なく、すべての児童に分け隔てなく愛情をそそぎます。日頃、高齢者との交流の機会が少ない児童は、おそらくこの指とまれで、まらないでし

学校との「リボレーション」 理想と現実

う。週一、二日はボランティアが教室に向いたり、図書室の一角を陣取ることに。日頃、高齢者との交流の機会が少ない子どもも、いやおうなく高齢者の愛の光線を浴びることになります。

以上は、理想的なりぷりんとボランティアの形態です。しかし、私が受け入れ依頼の営業をして回った多くの学校では、保護者ボランティアとの違いまで考えてくれることはありません。ボランティアの売り手市場から買い手市場に変わってきたここ数